

言語伝達と指示表現

--指示詞と呼称の用法をめぐる--

山田 義裕

1. 視点の一貫性と視点ハイアラキー

久野は一連の視点研究において、日本語と英語の様々な視点現象を共感 (empathy) 度という概念を仮定した上で、次の視点一貫性 (Ban on Conflicting Empathy Foci) という原則により説明を試みている (久野 (1978)、Kuno (1987: 207)を参照)。

(1) 視点の一貫性

単一の文は、共感度関係¹に論理的矛盾を含んでいてはいけない。

(1)は「話し手の視点は常に一定でなくてはならない」というごく自然な考えを共感度という概念を用い述べた言語使用の一般原則である。更に、発話に現れる複数の指示対象への共感度を相対的に決めるいわば物差しとして機能する視点ハイアラキーをいくつか仮定している。その中で、特に本稿の議論と直接関わる共感度関係決定の基準として「発話当事者の視点ハイアラキー (Speech Act Empathy Hierarchy)」がある (Kuno (1987:212)を参照)。

(2) 発話当事者の視点ハイアラキー

話し手は、常に自分の視点をとらねばならず、自分より他人寄りの視点

¹ 共感度の定義は次の通りである (久野 1978:134)

文中の名詞句の x 指示対象に対する話し手の自己同一化を共感 (empathy) と呼び、その度合い、即ち共感度を $E(x)$ で表す。共感度は値 0 (客観描写) から値 1 (完全な同一視化) 迄の連続体である。

をとることはできない。

(2)の視点ハイアラキーが実際の視点現象においてどの様に機能するかを(3)-(5)を例に見てみよう。

- (3) a. I met John at the party last night.
b.^{??} John met me at the party last night.
- (4) a. I met you at the party last night.
b.^{??} You met me at the party last night.
- (5) a. You met my brother at the party last night. (Right?)
b. My brother met you at the party last night.

(Kuno 1987:212)

(3)-(5)は *meet* を *meet for the first time* の意味で用いた場合の判断を示す。(5)のように、出来事に話し手が関わらない場合には主語と目的語は入れ替え可能であるが、(3)や(4)のように話し手と相手あるいは話し手と第三者の出会いを記述する場合には、話し手が主語で相手・第三者が目的語とならなくては不自然である。(3b)と(4b)の不自然さは、(2)の発話当事者の視点ハイアラキーとこれとは独立に仮定されている(6)の表層主語視点ハイアラキー (Surface Structure Empathy Hierarchy)²が矛盾する共感度関係を指定することに起因するというのが Kuno (1987)の説明である。

(6) 表層構造視点ハイアラキー

話し手は文中の(他の位置ではなく)主語位置に現れているものに最も容易に視点を合わせることができる。

(3b)と(4b)において、(6)の表層構造視点ハイアラキーは話し手の視点は目的語位

² (6)で用いている Surface Structure Empathy Hierarchy の定義は Kuno (1987:211)のものである。

置の me よりも主語位置の John や you に置かれることを要求するが、一方(2)の発話当事者の視点ハイアラキーからは John や you ではなく話し手自身 (me) に視点が置かれることが要求される。即ち、(3b)及び(4b)では(1)の視点の一貫性の原則に違反し、二つの視点ハイアラキーが単一文中で矛盾する共感度関係を指定することから、これらの表現が不自然であることが説明される。

(2)の発話当事者の視点ハイアラキーは、概念的に自然だけでなく(3)-(5)を初めとする様々な視点現象に妥当な説明を与えてくれるという点で実証性の高い制約である。しかし、一方でこの視点ハイアラキーから一見逸脱しているかのように見える現象が観察されている。話し手が、自分自身も関わるある出来事を述べるのに自分以外の人物に視点を置いた表現を用いる場合である。本稿では、このような発話当事者の視点ハイアラキーから逸脱する現象を日本語と英語のある種の直示表現 (deictic expression) の使用を例に考察する。具体的には、往来動詞 (第2節)、指示語(第3節)及び呼称(第4節)の使用と発話当事者の視点ハイアラキーの関係を見ていく。

2. 日英語の往来の動詞と話し手の視点

この節では、発話当事者の視点ハイアラキーからの逸脱がどのような場合に、どのような形で行われるかを、日本語と英語の往来動詞を比較し具体的に見ていく。往来動詞の使い分けには話し手の視点が重要な役割を果たしていることが大江 (1975) や久野 (1978) を初めとする研究で指摘されている。日本語・英語の往来動詞 (「行く・来る」及び go/come) の基本的用法は、話し手の視点という観点からおおよそ(7)のように特徴付けられるのが一般的である。³

- (7) a. 行く / go : 話し手の視点から遠ざかる動きを表す
b. 来る / come : 話し手の視点に近づく動きを表す

例として、「太郎が花子の家に移動する」という出来事を記述する場合に用いられ

³ 往来動詞のより詳細な特徴づけに関しては、大江 (1975)、久野 (1978) 等を参照。

る(8)と(9)の二つの表現を比較してみよう。

- (8) a. 太郎は花子の家に行きます。
b. Taro is going to Hanako's house.
- (9) a. 太郎は花子の家に来ます。
b. Taro is coming to Hanako's house

(8)が用いられる典型的状況は、話し手が太郎と一緒にいて太郎がこれから花子の家に向かう場合であろう。この場合、太郎の動きは話し手から見ると自分の視点から遠ざかる動きとなり(7)に従い「行く/go」が用いられる。(9)が用いられるのは、逆に話し手が花子の家にいる場合である。この場合、太郎は話し手の方へと向かって移動するわけであるから、話し手の視点に近づく動きとなり「来る/come」が用いられる。このように、第三者間の行き来を述べる場合、話し手の視点がどこに置かれるかでどちらのタイプの往来動詞が用いられるかが決まってくる。

話し手自身が往来の出来事に関わる場合は、発話当事者の視点ハイアラキーから視点は、当然、話し手自身に置かれることになる。それゆえ、話し手と第三者の移動では(7)に従い(10)が典型的な往来動詞使用のパターンとなる。

- (10) a. 僕は夕方太郎のところへ行きます。
b. I'm going to Taro this evening.
c. 太郎は夕方僕のところへ来ます。
d. Taro is coming to me this evening.

往来動詞を逆のタイプに変えると、普通の状況では非常に不自然に感じられる。(11)の日本語の例を見てみよう。

- (11) a. *僕は夕方太郎のところに来きます。
b. *太郎は夕方僕のところに行きます。

(11)が不自然なのは、話し手の視点が話し手自身ではなく第三者(太郎)にあるかような表現となっており、この点で「話し手の視点は常に話し手自身になくなくてはならない」ことを要求する発話当事者の視点ハイアラキーに違反しているためであると説明される。

これまでの例では、発話当事者の視点ハイアラキーは(7)で特徴づけた往来動詞の使用を正しく予測する。ところが、英語で話し手と聞き手の間の移動を表す場合、この往来動詞の使用についての特徴づけと一見矛盾するケースが観察されている。

(12) a. I'm coming/*going to you this evening.

b. I'll come/*go to your office at 6 o'clock tomorrow afternoon. Please be there.

(12)は自分が相手の居場所に向かう移動のため、(7)に従えば視点から遠ざかる動きを示す *go* が用いられるべきだが、実際には *go* は不自然で *come* が使用されなくてはならない。⁴

日本語の往来動詞「来る」には(12)の *come* に相当する用法はなくあくまで(7)の特徴づけに従う。⁵

(13) a. 僕は夕方君のところへ行くよ (*来るよ)。

b. 僕はパーティーへは6時に行くつもりだ (*来るつもりだ)。そこで、また会おう。

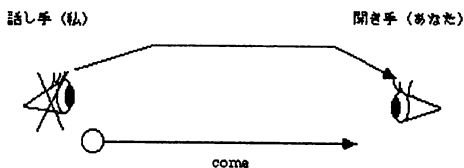
(12)における *come* の用法の説明に「視点の移行」という考えが有効である。視点の移行とは、話し手が自分の視点を一時的に自分以外の人間に移し、いわば他

⁴ 話し手が聞き手のところに移動するのを表現するのに *go* が使用される特殊なケースについては大江 (1975: 43-44) を参照。

⁵ ここで用いている日本語の判断は標準的日本語のものである。日本語でも、例えば九州の一部の地域の方言では、自分が相手のところに向かうのに英語と同様「きみんちに来るけん」のように「行く」の代わりに「来る」が使用されるようである。

人の視点でものを眺める認識の仕方を指す。話し手が聞き手のところに向かう(12a)の場合を例に、視点の移行が往來の動詞の用法にどのように反映されるかを見てみよう。(12a)の発話で、(14)に図示するように、話し手が聞き手に一時自分の視点移して出来事を眺めるとしよう。

(14) 聞き手への視点の移行



視点の移行を仮定すると(12a)の移動が何故 go ではなく come になるかが(7)の往來動詞の特徴づけから自然に説明される。つまり、話し手は視点を聞き手の側に移行することで視点を到着点側に置くことになり、この移動は出発点ではなく到着点から見た移動、すなわち視点に近づく動きと認識されるため(7)に従い go ではなく come が用いられるのである。

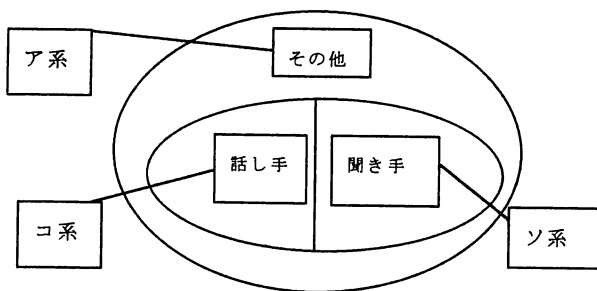
視点の移行が実際上述のような形で言語使用に反映されるとすると、「話し手が自分が関与する出来事を記述する場合は常に自分自身に視点を置く」ことを要求する発話当事者の視点ハイラキーという言語使用の一般原則からの逸脱となる。しかし、もし視点の移行による発話当事者の視点ハイラキーの逸脱が一般的に見られるとすると、この逸脱はこれまで気づかなかつたわれわれの言語使用のある隠れた側面を照らし出してくれる興味深い現象である可能性がある。以下の節では、視点の移行による発話当事者の視点ハイラキーの逸脱が例外的現象ではなく、日本語でも英語でもある種の直示表現の使用において一般的に観察されるものであることを見ていく。

3. 指示詞の使用にみられる視点の移行

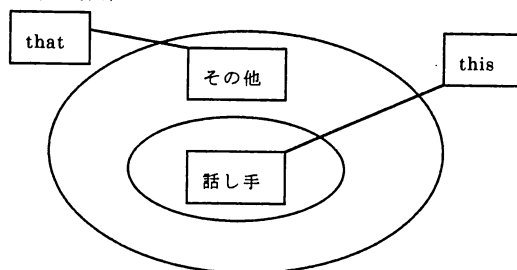
この節では、視点の移行という認識作用の言語使用への影響について英語と日本語の指示表現の用法を例に見ていく。

まず、英語と日本語の指示体系を比較してみよう。日本語では話し手の領域・聞き手の領域・その他の領域を指すのにそれぞれ「これ」・「それ」・「あれ」に代表される3タイプの指示表現を使い分ける。一方、英語ではもっぱら聞き手の領域を示す「それ」に相当する指示詞はなく、話し手の領域を指す *this/here* とそれ以外の領域を指す *that/there* のみである。

(15) a. 日本語の指示体系



b. 英語の指示体系



日本語では「こ・そ・あ」のうちどのタイプの指示詞が用いられるかは指す対象が話し手から見てどの領域にあるかにより厳密に決まっており、(16)のように異なるタイプの指示詞への交換は不可能である。

(16) a. これ/*それ/*あれ、君にあげるよ。

(話し手が聞き手に渡すものを手に持っている状況での発話として)

b. その/*この/*あのペン貸してよ。

(聞き手がペンを使っている状況での発話として)

c. あの/*この/*その鳩どこから出したんだろうね。

(話し手と聞き手が観客席から手品を見ている状況での発話として)

(16)の事実は、話し手は視点を常に自分自身に置いてそれぞれの領域にいる人や物を眺めねばならず、自分の視点を自分以外の領域にいる人や物に置くことは出来ないことを示している。この意味で日本語の指示表現の使用は発話当事者の視点ハイアラキーに強く従っている。

一方、英語の指示表現の使用は日本語と比較してより自由に思われるケースがある。(17)がその例である。

(17) a. Who's this?

b. Is this Taro?

(17)は電話の相手が誰かを確かめる時の発話である。自分の領域の外の人や物を指す場合の指示詞は **that** が普通だが、英語、特に米語では電話の向こうの話し相手を指すのに自分の領域を指す **this** を用いる。もちろん、日本語では電話の向こうの相手を指して「こちら」とは言えない。

逆に、話し手が自分の手元にあるものを指すのに、**that** や **there** が用いられる場合もある。(18)を見てみよう。

(18) a. You can have that.

b. How about there?

(18a)はある映画で自分が手に持っているポップコーンを相手にあげる場面でのセリフである。自分がまだ手に持っているポップコーンを指して自分以外の領域にある物を指す **that** を用いている。また、(18b)は店員が客にシャツのロゴをどこに入れるか尋ねている文と考えて頂きたい。自分でシャツを持ち、手もとのシ

ヤツのある部分を指さして *there* といっている。⁶日本語では、自分の持っているものを指して *that/there* に相当する「それ・あれ」、「そこ・あそこ」は使えない。

(17)や(18)のような日本語では不可能な英語の指示詞の用法を「話し手の視点」という観点からとらえた場合、この用法の裏には(12)で見た英語の往来動詞 *come* の使用に見られるのと同じ「聞き手への視点の移行」という認識作用がはたらいていることが分かる。(17)の場合、話し手は電話の相手へ自分の視点に移していると仮定してみよう。この視点の移行に伴い相手は話し手の領域内に入ってくることになる。そのため、この場合話し手の領域を示す指示詞 *this* の使用が可能になると説明できる。また、(18)の場合は、逆に相手に視点移して聞き手の視点から自分の手元にあるものを眺めていると考える。とすると、自分の手元にあるものであっても視点の移行により話し手の領域の外にあるものと見なされ *that/there* が用いられることになる。

このように、英語では往来動詞や指示詞の使用に「聞き手への視点の移行」という認識作用が決定的に関わっており、これが言語使用の一般原則の一つである発話当事者の視点ハイアラキーから逸脱した直示表現の用法を可能にしていると考えられる。日本語では、一部の方言を除いては往来動詞・指示詞の使用に「聞き手への視点の移行」が反映されることはない。たとえば、相手の所に向かうのに聞き手へ視点移し「*これから君の家へ来るよ」とは言えないし、また自分が手に持っているものを聞き手の視点から眺め「*それは誕生日のプレゼントなんだ」などとは言えない。では、日本語において、視点の移行という認識作用が言語使用に影響し、発話当事者の視点ハイアラキーから逸脱する現象はないのであろうか？次節では、日本語における発話当事者の視点ハイアラキーからの逸脱現象の例として、呼称の使用を親族名詞の用法を中心に見ていく。

4. 呼称と視点の移行

英語では往来動詞・指示詞の使用に視点の移行が深く関与していることを見てきたが、日本語では呼称という英語とは別のタイプの表現の使用にこの認識作用が大きく影響している。この節では日本語の呼称の使用に視点の移行がどう影響

⁶ 国広 (1985) を参照。

するかを親族名称を中心に考える。

日本語の呼称の使用は、指示語の場合と同様に基本的には発話当事者の視点ハイアラキーに従う。つまり、呼称を用いる場合は自分自身の視点から見た関係を示す名称を用い、自分以外の人の視点を通してみた呼称の使用は不自然なことが多い。具体的に言うと、子供が母親を呼ぶ場合には、「おかあさん」や「ママ」のように自分の立場から母親と自分の関係を認識して適切な呼称を選ぶ。この場合、子供が例えば遊びにきている母親の妹の視点を一時かりて、母親を「おねえさん」と呼ぶことはありえない。また、子供が自分の父親の視点をかり、祖父を「おとうさん」と呼ぶこともない。

しかし、一方で日本語には自分以外の人物に視点を移して呼称を用いていると思われるケースもかなり広範囲に見られる。たとえば、鈴木(1973:167)で述べられている次のエピソードはその典型例である。

…私の乗っていた国電山手線が、新宿駅に着いた時のことである。車内の乗客のほとんどが降りて、席がガラすきになったと思うや、どっと新しくお客が乗り込んできた。私の隣に足早にかけより席を占めた老婦人が、自分の側の座席を掌でたたきながら、「ママここにいらしゃい」と怒鳴ったものである。すると乗客の中から、赤ん坊を抱いた若い娘が現れて老婦人の側に座った。明らかに、母親が娘をママとよんだのである。…

このエピソードに出てくる老婦人は、自分の娘の子供の視点をかりない限り、娘を「ママ」とは呼べないはずである。また、父親が子供に対して自分を指すのに「おとうさん」や「パパ」という呼称を使うケースもごく普通に見られるが、この場合も父親が子供の視点で自分を見ていると考えるしかないであろう。このように、日本語では呼称の使用に視点の移行に伴う発話当事者の視点ハイアラキーからの逸脱が多く見られる。以下では、このような日本語の呼称の使用を自分を指す場合と相手を指す場合に分け、日本語の呼称表現の特性を視点の移行現象という観点から見ていくことにする。

人を指し示す場合、英語をはじめとする多くの言語では人称代名詞を用いることが多い。一方、日本語では人を指す場合の表現は人称代名詞だけでなく親族名

称や地位名称も多く用いられる。このため、日本語で人を指す表現を扱う場合は人称代名詞をその一部として含むより広い概念が必要である。鈴木（1973, 1982, 1998）は、この観点から、自分を指す表現を自称詞、相手を指す表現を対称詞、対話に登場する第三者を示す表現を他称詞と呼ぶことを提案している。以下、鈴木による一連の呼称研究を紹介しながら、日本語の呼称、特に親族名称の自称詞・対称詞としての使用が視点の移行による発話当事者の視点ハイアラキーの逸脱現象として興味深い特性を持つことを述べていく。

まず、日本語の自称詞について見ていこう。話し手が自称詞に人称代名詞を使用する場合は、発話当事者の視点ハイアラキーに従い「ぼく」や「わたし」のような一人称代名詞を用いなくてはならない。自分自身を指すのに、聞き手の視点から自分を眺め二人称の「きみ」や「おまえ」を用いたり、第三者の視点から自分自身を「あいつ」や「かれ」などとは呼べない。⁷これと比較して、自称詞として親族名称が用いられる場合を考えてみよう。例えば、父親や母親が自分の子どもと話す場合、自分を「おとうさん」、「おかあさん」と呼んだり、兄や姉が年下の兄弟に向かい自分を「にいさん」、「ねえさん」と呼ぶのは日本語では極めて一般的な呼称の使い方である。この呼称の用法を話し手の視点という観点から見た場合に重要なのは、話し手の視点は自分ではなく話し相手に置かれており、話し手は相手の立場から自分自身を眺め親族名称を用いているという点である。例えば、「おとうさん」というのは子どもの視点から父親を眺めた場合の関係概念であり、父親が自分を「おとうさん」と呼ぶ場合は子どもの視点をかりて自分を眺めていることになる。このように、日本語において親族名称を自称詞として使用する場合には、英語の指示詞の使用に見られたのと同じ「聞き手への視点の移行」が観察される。⁸それゆえ、日本語においても、呼称という英語とは異なる領域で、

⁷ 英語において自分を二人称・三人称で言及するケースは、鈴木（1996）を参照。

⁸ 親族名称を自称詞として用いる場合にみられる聞き手への視点の移行には、(i)の興味深いパターンがあることが鈴木（1973:153）を初めとする研究で指摘されている。

(i) 話し手は自分の目上に対し、自分を相手の立場から眺めた親族名称を使えない。

聞き手への視点の移行という認識作用に裏打ちされた発話当事者の視点ハイアラキーの逸脱現象が存在しているのである。

次に、日本語の対称詞の使用について見ていく。相手を親族名称を用いて呼ぶ場合、話し手は自分自身に視点を置いた上で自分と相手の関係を基準に親族名称を選ぶのが普通である。例えば、子どもが母親を呼ぶ場合には母子の関係をもとに「おかあさん」という呼び方になるし、弟が兄を呼ぶ場合は兄弟関係に基づき「おにいさん」となる。しかし、日本語にはこのパターンから逸脱した、鈴木(1973)が第二の親族名称の虚構的用法と呼んでいる興味深い対称詞の用法がある。具体的には、母親が自分の長男を「おにいちゃん」と呼んだり、夫が妻を「おかあさん」と呼ぶような場合である。⁹鈴木(1973:171)は、この親族名称の虚構的用法には次のような法則があることを指摘している。

- (19) 日本の家族内で、目上の者が目下の者に直接話しかけるときは、家族の最年少者の立場から、その相手を見た親族名称を使って呼びかけることができる。

つまり、母親が長男を自分の兄でもないのに「おにいちゃん」と呼ぶことができるのは、末っ子の立場から長男を眺めて呼びかけるということが可能だからである。言いかえると、母親は自分の視点を一時的に家族内の一番下の子供に移して長男を呼んでいるのである。

日本語の対称詞の使用には、このように最年少者への視点の移行による親族名称の虚構的用法という特異な発話当事者の視点ハイアラキーからの逸脱現象が観

例えば、弟が自分より目上の兄に対し、兄の立場を通して自分を眺めた表現である「おとうとちゃん」は使えない。別の言い方をすると、親族名称を自称詞として用いる際に見られる聞き手への視点の移行は、上の者が下に対しては可能だが、下の者が目上に対しては行わないということである。

⁹ 普通言われる親族名称の虚構的用法とは、血縁関係のない他人に対して親族名称を使うケースである。例えば、若者が自分とは血縁関係のないお年寄りに「おじいさん」や「おばあさん」と呼びかけるような場合である。

また、第二の虚構的用法を *oikonymy* という概念を用いて分析する試みについては鈴木(1998)所載の論文「テクノニミー (teknonymy) という概念について」を参照。

察される。

さらに、鈴木（1973:175）では関東や東北の一部地域の方言に親族名称の虚構的用法が興味深い形で観察されることが報告されている。¹⁰これらの地域では、弟や次男以下の兄弟を指して「おじ」とか「おんじ」という名称が用いられる。鈴木はこの「おじ・おんじ」の方言的用法には、変則的な形での子供への視点の移行が関わっていると分析している。基本的考え方は、家族の中に架空の最年少者を想定してその視点でものを眺めているというものである。昔の家父長制度のしっかりしていた日本の大家族では長男が家庭をもって家を継ぎ、さらにその後を継ぐ子供を産むことが当然と考えられてた。そのため、大家族の長男の子供というポジションはこの制度では非常に重要でリアリティを持ったものであった。次男やその下の兄弟は、いずれ長男が家庭をもち子供を作れば、その子からは「おじさん」と呼ばれる。家族のみんなは、たとえ長男がまだ子供を作るような年齢でなくても、長男の子供というポジションに自分の視点に移し、そこから次男以下を眺めていると考えるのである。そうすると、なぜ次男や三男がおじさんを意味する「おじ」や「おんじ」と呼ばれるか説明できるというわけである。

このように、日本語の対称詞の使用は、このような親族名称の方言的使用を含めて考えると独特の多様性を示しているが、この裏には鈴木が指摘するように視点の移行という認識作用が働いているのである。

この節では、日本語の親族名詞の使用には視点の移行という認識作用が深く関わっていることを見てきた。自称詞の使用においては聞き手への視点の移行を利用した親族名称の用法が観察され、対称詞の場合は家族の最年少者への視点の移行による親族名称使用のヴァリエーションがあることを見た。話し手の視点は常に話し手自身にあることを要求する発話当事者の視点ハイアラキーからの逸脱が、日本語の場合にも呼称の使用という英語とはことなるジャンルで観察されることが分かった。

¹⁰ 親族名称使用の方言差については、井上（1991）や佐藤（1998）も参考になる。

5. まとめ

久野が言語使用の一般原則の一つとして提唱している発話当事者の視点ハイアラキーは、概念上自然な仮定であるだけでなく、経験的にも守備範囲が広く説明力の高い原則である。しかし、一方でこの原則から逸脱する現象が存在することも事実である。本稿では、英語の往来動詞と指示表現、及び日本語の呼称の使用にこの原則からの逸脱現象が観察されることを見てきた。これらの表現は、いずれも直示的特性を持つ言語表現で、その使用には発話の場を構成する時・場所・話し手/聞き手などの要因が大きく影響する。特に、本稿で扱った表現の使用には話し手の視点が決定的な役割を果たしていることを見てきた。話し手の視点は話し手自身に置かれるのが普通であるが、我々は時として自分以外の人の視点をかり相手や第三者の立場で事態を眺めることがある。¹¹この視点の移行は、それ自体は言語の使用とは独立した一般的認識作用であるが、実際の言語の使用にこの認識作用が利用される場合があるのである。面白いことに、どのようなタイプの表現の使用にこの認識作用が利用されるかは言語間あるいは方言間で異なっている。例えば、聞き手への視点の移行を利用した往来動詞の用法は英語や日本語の一部の方言では可能だが、標準的日本語には見られない。一方、家族の最年少者への視点の移行を利用した対称詞の使用は日本語では極めて一般的だが、英語をはじめ他の多くの言語でこの現象は見られない。このような言語間あるいは方言間の違いが何に起因するかはすぐには明らかでないが、本稿の考察から発話当事者の視点ハイアラキーの逸脱の裏には視点の移行という認識作用が一貫して関与していることが分かった。

参考文献

井上 史雄 (1991) 「「お兄さん」と「お姉さん」の謎 ---親族名称と呼称の構造 ---」『言語』第 20 卷 7 号、大修館書店。

¹¹ 視点の移行というのは、発達的には複雑な学習を必要とする高次な心理作用で、4～6歳になってこの能力が高まっていくということが正高(1999)で指摘されている。この論文では、さらに直示動詞の習得時期と他者への視点の移行という認識能力の発達時期とを比較しこれらの関連性についての議論も行われている。

- 国広 哲弥 (1985) 「言語学道場」『言語』第 14 卷第 3 号、大修館書店。
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』大修館書店。
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax; Anaphora, Discourse and Empathy*.
The University of Chicago Press.
- 正高 信男 (1999) 「認知と言語」桐谷滋 (編)『ことばの獲得』ミネルヴァ書房。
- 大江 三郎 (1975) 『日英語の比較研究』南雲堂。
- 佐藤 和之 (1998) 「方言主流社会の呼称行動と言語意識」『日本語学』第 17 卷 9 号、明治書院。
- 鈴木 孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店。
- 鈴木 孝夫 (1982) 「自称詞と対称詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座第 5 卷---文化と社会---』大修館書店。
- 鈴木 孝夫 (1996) 『教養としての言語学』岩波書店。
- 鈴木 孝夫 (1998) 『言語文化学ノート』大修館書店。
- 田窪 行則 (1997) 「日本語の人称表現」田窪行則(編)『視点と言語行動』くろしお出版。